

園行事 うんどうかいの検討 No. II

— 保育所におけるうんどうかいの方法をめぐっての事例 —

勝木 洋子

○森川 紅

(兵庫県立姫路短期大学)

(姫路市立広西保育所)

1. はじめに

保育所は、長時間・長期間の保育のうえに多様な保育ニーズに応じて、乳児保育、障害児保育、延長保育等に取り組み、また、職員の勤務が週休2日制(変則を含む)のなかで週6日の保育をしている。そのような中で園行事としての運動会を考え直したいと取組んだ昨年度の結果を、前47回大会に「練習をしないうんどうかいをめぐっての事例」として報告した。それは従来からよくある見せるためではなく参加者全員が楽しめる「コーナー運動会」であったが、終了後保護者の反応は概ね賛同者が多かった。中には、従来の慣れ親しんだ運動会がよいという意見もあった。保育者は従来のやり方に比べるとより子どものための方法であるが、子ども一人一人が主体である運動会となるにはまだ再考の余地があるとした。

本論は、本来の趣旨を生かし反省を踏まえて、乳児保育や障害児保育にも視点を当てた「練習をしないうんどうかい」について考えたい。

2. 目的

昨年度の経験を生かして、子どもを中心として家族や地域の方々みんなが楽しめる運動会をめざし、①親子の触れ合いを大切に、②一人一人の発達課題をおさえ、③身体や身近な遊具を使って、④園全体の雰囲気味わってほしい、ことを目的とする。

そこで、子どもの発想を生かしながら子どもと保育者の創造活動として、0歳から5歳児が1日の大半を過ごす保育所における運動会のあり方を探りたい。ま

た、乳児や障害児が主体者として参加する「練習をしないうんどうかい」の意図を保護者に理解を求め、子どもを中心にみんなが楽しめるようにしたい

3. 方法

日時：1995年 9月23日(金) 9時～12時

場所：姫路市立H保育所の園庭および遊戯室と保育室

対象：園児(0～5歳)、保護者、修了児、地域の人々

参加人数：園児 119名、その他 150名

クラス編成は0～2歳児は年齢別で、3歳以上児は縦割りクラスである。運動会は昨年と同様に2部形式が子どもにとって一番よい運動会になるとし、7月から計画を立てミーティングを重ねた。保育者は子どもが興味を持っている運動的遊びや一人一人の発達課題を具体的に抽出し、検討を重ねた結果を凡その年齢を想定した段階にわけ、表1にした。これらの運動遊びの中で、運動ができるできないではなく、子どもが興味ある活動に満足できるまで取り組み、それを楽しむと次の運動遊びに取り組むようにする。

運動遊びを中心の活動にする時は、園庭に移動体育遊具を設定し、子ども達は自由に好きな運動に取り組む。保育者は移動体育遊具を使った動きの見本を見せて、子どもにはその通りにさせるというのではなく、子どもには自由にやらせ、保育者は安全に配慮し好ましい遊具の扱い方に気づかせるようにする。移動体育遊具の組み合わせ方には、年長児の場合は子どもの意見を取り入れながら一緒に考えていくが安全面の確認は保育者がする。

表1 運動遊びの凡その年齢を想定した段階例

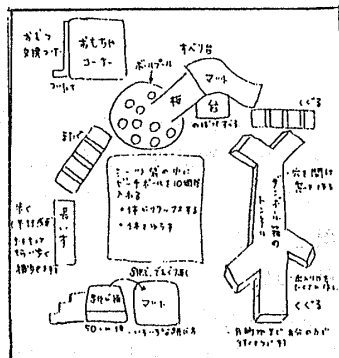
段階	内 容	段階	内 容
1	・ハイハイ ・高跳び ・つかまり立ち ・伝い歩きをする ・歩く ・段ボール箱等を押す ・ボールを握る、転がす	5	・スキップをする ・走りながら急に止まる ・片足でバランス ・床に置いた丸太の上を、バランスを取りながら前進、後進、横歩 きなどで渡る ・ゴムのハードルを跳び越す ・ケンパで前に進む ・平均台を前、横、後ろ歩きを組み合わせて進む ・巧技台に梯子を渡し、下から登る ・補助されて逆上がりや前回り、足抜き回りを(鉄棒) ・前転する、手足を伸ばす又は縮めて横転する(マット) ・両足を交互に出して、後ろ歩きをする(平均台) ・登り棒を登って、足をしっかりとからませて片手を離す
2	・台の上によじ登ったり跳び降りたりする ・段ボール箱の中を出たり入ったりする ・滑り台を滑る ・段ボール箱等を押したり引いたりする ・鉄棒をぶら下がる ・高さ、幅、長さの異なるトンネルを這って進む	6	・リレーをする ・連続で両足跳びや片足跳びをする ・助走して来て踏み切って、両手をつき大人の馬を跳び越す ・大玉前転をする ・走りながらボールをつく ・1字バランスをする ・短縄で前跳びや後ろ跳びをする ・約50度の角度に取り付けた戸板を手を使わずに駆け上がる ・思い切って高くジャンプしたり、遠くへ跳んだりする ・連続してケンパをする ・片足逆上がりをする(鉄棒) ・2本棒登り降りをする(登り棒) ・台上から跳び降りる ・力を調節しながら、押したり引いたりする
3	・走る ・台によじ登って、両足を揃えて跳び降りる ・でんぐり返しをしたり、横に転がる(マット) ・踵で歩いたり、爪先で歩いたりする ・馬になった大人の背中にバランスをとりながら乗り、足の親 指に力を入れて跳び降りる ・的に向かってボールを投げたり転がしたりする		
4	・ギャロップ ・両足跳びをする ・伝い歩きをする(ジャングルジム) ・連続して開脚跳びをする(グーパー) ・前転する(マット) ・上がる、降りる、くるくるの繰り返しをする(平均台) ・腰を使って重みのある物を押したり引いたりする		

次に運動遊びの場面の一例をあげると、

○乳児の運動遊びの例(図1)

・牛乳パックを利用して作った柵や階段長椅子でつかまり立ちやつたい歩きをする。

・ビニールプールに一杯のボールを入れたボールプールを作り、その中に滑り台の滑り面を入れる。自由に滑って遊ぶ



・大きな布袋にビーチボールを10個余り入れ、その上で様々な動きをする。

乳児コーナーを遊戯室に設定することにより親子、きょうだい、祖父母等と共にじっくりと関わって遊べるようにする。

○総合的な場面として

ジャングルジムの山越え：ジャングルジムに戸板を立てかけその上にマットを置き坂を作る。年長児は手を使わずに駆け上がり、ジャングルジムから跳び降りる。年長児が挑戦する姿に影響を受けて、年少児はマットの横を持ちながら登りジャングルジムの降る。

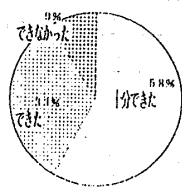
ケンパ：床に図を描いておく。昔よく遊んだ遊びを保護者や地域の人達から子どもに伝えてもらう。

裏庭探検：運動会をさらに総合活動にするため、園舎の裏側を一回りできるように様々な遊び「潜る、飛び石渡り、いろいろな音（空き缶、鍋、しゃもじ、スプーン、がらがら、鈴、タンバリンなどの楽器）を鳴らす、丸太渡り、狭い所を通るなど」ができるように工夫する。そこを、様々な楽しんで遊びながら進む。

3. 結果と考察

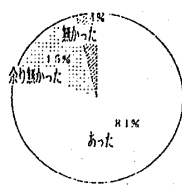
運動会の翌日保護者に「運動会についてのアンケート」を配付し回答を得た。回答者96名、回答率81%。アンケートは12項目で3段階評価と記述式にした。

○子どもと喜びの共有できましたか



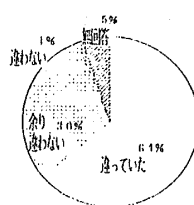
- ▼ 日頃の保育所での生活がよく分らずお便りで知っていましたが、実際に遊んでいる姿を見てとてもよく分かりました。子どもと楽しめたのがよかった。
- ▼ 久しぶりに「子どもを中心とした笑い」ができた気がしました。いつもは「どうだ、面白いだろう、うれしいだろう」なんて押しつけ型の笑いや喜びが多いのではと思いました。
- ▼ 最後までやりとげた嬉しさを一緒に味わいました。

○新しい遊びがありましたか



- ▼ 裏庭探検：私もドキドキ♡向こうに何かあるのかな楽しみ！とも思えたり、子どももいろんな障害物に体当たりしていました。
- ▼ 鍋の楽器：そういえば昔いろんな物を叩いて音を出して楽しんだなぁと。今は水の入ったコップやお茶碗をチンカンやると「コラッ」ですものね。
- ▼ 親子体操：自分の体を一周させる。
- ▼ 遊び道具が山ありそれを遊び道具として遊べていた姿にびっくりした。

○イメージしていた運動会でしたか



- ▼ 競技、お披露目か普通かなと思っていました。一緒にするという事は楽しみが2倍になります。
- ▼ 私達仕事を持った親は中々子ども達の普段の姿というものを見ていないので、保育所で毎日どのようなように過ごしているか又、どんな遊びをしているか分からない面があります。そういった意味で「よそいきの運動会」ではなく普段の子どもの遊びをそのまま取り入れた「ありのままの運動会」という感じでとてもよかった。

○運動会のイメージについて

ラジオ体操、親子体操、行進、組体操、鼓笛隊、玉入れ、綱引き、勝てば点数が多く負ければ無いといった具合に勝敗を競う、運動会の日まで毎日練習して皆が同じように動けるようにして一つのものを作り上げていく、競技・演技を見る親とする子ども、保護者はビデオやカメラを持って炎天下で見ている、お弁当を持って家族で食べる、競争することは悪くないと思う、毎年ビリのかけっこも悪くないと思う、毎年ビリの予の成長を見ることも大切だと思う、その予の成長は少しずつでもあるはずだと思うなど。

アンケートには、過半数の保護者から様々な意見が寄せられた。保護者には「コーナー運動会」に理解を求める便りを出し、又、保護者には機会がある毎に子どもの様子を伝えた。「練習をしないうんどうかい」として2年目の取り組みでもあり、グラフに表れた通り保育所らしい運動会としての高い評価を得た。しかし、我が子の晴れ姿を観客として見たいという保護者には理解できないことが多いようであった。

保育者の運動会に対する取り組みや結果に対する満足度・充実感を点数で表すと平均が69.5点であった。乳児のためのコーナーでは工夫して作ったいろいろな遊具で、満足いくまでよく遊んだ。障害を持つ子どもにとっては、同年齢児との比較ではなく自分の興味のある運動遊びに何回も取り組む喜びがあった。「コーナー運動会」は個々の子どもの運動遊びに対する興味や関心に沿って取り組むことができ、保育者は、「運動遊びの凡その年齢を想定した段階」表を作成したことで一人一人の運動遊びの興味の持ち方が分かり子どもの運動能力や発達段階を考える機会になった。又、子どもが生き生きと運動遊びに取り組み、運動好きになってもらうための努力や工夫を自分に課せていた。

4. おわりに

園行事運動会を子どもと保育者の創造活動として、「楽しい!」「この子の発達にふさわしい」と思って創りだしてもそこに保護者の賛同がないと子どもの真の喜びとならない。三者が一体となってこそ園行事運動会の意味がある。さらに乳児、障害児、健常児が一緒になって遊ぶからこそ総合園としての運動会の意味ある喜びとなる。練習に練習を重ねた結果の運動会よりも遊びの積み重ねが様々な運動機能を伸ばすことになり、子ども中心の保育の重要さを子どもの姿を通して伝える努力がまだ必要だと痛感した。